



芭蕉句集 上



今をむり、京極中川の寺よりま
こけ東山園傍の草の庵よかき
径々もともや十子よけりの枝の
年あちけきく乃折ぬしを
芭蕉翁の及句をよみて詠
ふふその世形なりさのあまう



古芳の蕉翁句集乙洲の及小文
史邦の少文庫支考の及日記
桃結の津妻の島風國の泊船集
多門人の古き句集を輯録
うの芭蕉句集のいやすをある
うの芭蕉翁の句集を著述して

上
一

る一午の芭蕉翁の句集
乃と我の及句集を小冊
物一子花畧月夕の好士の
袖あすの事ありあつたんと
業林井筒の及句集の及ぬに
よるその句集の及つた年

歴々の次第を書きし人年歴此
分ゆきし所を抄の句題の巻
み書きし句体は流石ありとを
志しむ四季のあつてはふ
葉乃事とて流集の中は同矣
あつては事乃句集に下りて志す

句選みあつてはふ百字句
かりしは抄の書きし拾ひ
あつては事とて流集の句を
追加ししは事とて流集の句を
かりしは抄の書きし拾ひ
あつては事とて流集の句を

高き城正さん子も後世
人々少くも世を去り

安永五年五月あや草をうら

世を及幻阿書之



上三

芭蕉公翁後句集上



春

庭洲の浮草誰うと今朝の春
後をわたり心も我のちかき
まゝ立や新年もあや草をうら
山家よまをさへし
誰をうらとあや草をうら

嵐雪の舞をうやむ月小袖を贈りけり
誰かうやむ中似たりと物乃とも家
音の通るを此の鳥行かん酒
のにおもふとえ日なまそと集そ
餅をいさうしぬ
二日にもぬるまをいぬる所を
まき立くまこ九日乃聖山、ふか
え日よ田とて終日とそ急し公れ
都ちなきにぬるまをいさうしぬ

上
四

薦を巻く人いさきをむのそと
御所はまをなをいさかむうす耐
三日只瓜田と題す月四日
大津路の年事終るし人そ何佛
馬くや猿まをさく内猿乃面
人まをぬまや鏡のうし終梅
蓬萊小笠を也伊勢終知くうま
子百一に都へ行く友もこのか
古畑や葺はくしく男とも

よくつんばを芥花とて垣根に
萬葉下りりよる葉の山を女系
一と勢子一度つまらてさつり
うらむ葉や赤花のうらむ葉の
葉もや解き葉もさる 掾の先
こは梅も牛も初まると啼つる

は草のあつた庭あり

菊のよき梅も余は花も縁に

伊加のあつた庭あり

挽の守古果と梅の成りゆく

秋風の宿の山家とて 二句

梅のよき葉のや 鶯のめす
梅も花のよき葉のめす
うらむ葉やさるる葉とて
あつた梅のよき葉のめす

山家

も鼻のよき葉とて梅の成りゆく
伊加のあつた庭あり

夜より燈をとも薪よの火をいり
阿まききあり

多ふ白へうにちる岡を梅乃花
門人何来とち行くまゝあは
馬乃駕しと

わきもたかきと薪の中形も梅のたま
伊勢の非垣乃月よ梅一本のま
子と館の後下一本のま
は子良子花一ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

細代民部の息ふあひと
梅乃木に物ヤとら木や梅をさ

園女うたか
暖か屋の奥そのゆり水は梅
山里冬乃案木まじり梅をさ

阜袋真月待
月待や梅うけけり中山ゆ
里をさる梅折乃をさ年の更
妻よやくくたゆくのさ月と梅

吉野の菩提寺を二首

凍る雪の中を以て汲かき清く水
を煮白くして飲むふやうな

尾別菩提寺奉納

笠寺やいぬ窟もまはる
春もや蓬もとのまに草乃道
不持もやあまの起る海に春の雨
けふ雨や善吹くは川やあま
まはるや蜂の巣つるふを招乃漏

上八

伴がらの園に彼の庄新大佛を

丈六なり陽を高く石重なり
かきまやまのちのちのち一
二寸
湯火のりより肩より川
かきまやまのちのちのち

指針くめり

瀬の糸入て来よ瀬田のたぐ
袖よりくも田螺の海士のひまを
藤ふすくく白くもを清ぬく

眼や志く魚一ろまき一寸

夏別

鮎の子はふ魚とて別うか

観子圖傳

白魚や志き目をあくは乃細

老情

蛎より志く海苔とて老の志をもせて

子里う汗あく

海苔汁の子はふきくりは若梳

ねろくや歯を吟めて海苔の魚

二月半に熟りて

水くやこころは偽乃雪の書

是糖の刺鮎の醫門を志かき

知むる小瓶の刺一匹の卵

伊勢く

卵扱や志くもかけ守は船乗係

卵扱志く志く西の洞を志く

卵扱乃信を志く二句

躑躅のやまのむらさきもよの嵐の舟
何乃木の春もよの嵐の舟

莊子 徐積

唐古の泥僧よりん飛くくく
蝶のよふくくくくの中の日影のよ
起りくくくくくくくくくくく

古本亭

蝶の羽のまなこゆる埃の屋根
古池や蛙とくくくくくく

まきと目し蝶くくくくくくく
糸の中も物もよつくくくくく
雲者よりよりよくくくくく

高野まき

父母乃頻りくくくくくく
ひくくくくくくくくくくく
蛇くくくくくくくくくく
杯くくくくくくくくくく
煤あうて埃くくくくくく

雀子と家多啼みの守籠乃巢

田家にあつて

麦飯千やつとくゑう猫のつ戸
猫の急やむとた園乃終月

湖水眺望

辛啼の招き信より脱るる

高きまを故人再列

二投よりこれ初より鹿乃角
雲の笠落し重宿梅の部

上十一

落きまよ水糸一より花椿

梓打の襷

は掘乃むう一橋と梅のよ

山路来く何屋よりゆのま

呂丸う詠まきみきり

裳帯より重あまき八塚のす

善提山

山寺の如也さ告と母老かり

二高軒

教つても身門をむくはるは毎事

静氏尚今有職の人を為さば

物に各をまのしぬ萩乃わの葉を

茅今の画像

薄くくはるまのやや原のま

本弟は情をや生のくま乃の草

ま柳の泥をまのま乃の干水

位る方の人を徳と移風を別路

うけ

弟の戸も位はるゆか伏る雛の家

伏ん西巻も位はるまのま

我衣もゆかは桃のまをま

まま巻も桃様はる内人のま

嵐をま

ま乃まに桃と様や草結候

始へま解る我のまね桃の花

咲まはる柳のまはる初ま

伊がまと聖葉師寺初會

初さささるけりも多ふよ記日形く
顔よりぬぬ愛白もあまたの梅
さ長七重七出ま休庭八重梅
西の梅をまき
多儀は風おきゆらん山ささる程
習ふく世きを捨てて旅人土芳
大仙寺にあふ
命あふ山中も活きぬ梅の那
山はささる瓦ぬくそのまの二三

梅丸おは君お野花見澄さを
くさふやうりく
換くものりねもひあき梅のふ
さのさしに事対ふ
芽梅のく梅のさき梅梅木並
梅のさきさきさき日へに里に里
廟あき酒を飲む陰やちささる
山家
梅はささる山嵐おのささる

似合—や豆の粒先—に梅の葉
木はのこもけも籠もけりる家

万平別墅

春の夜を梅の影を花の影を
春の夜を梅の影を花の影を

白雲の如き

阿蘭陀も花の葉にけりる
阿蘭陀も花の葉にけりる

愛方酒堂食竟録神

花よりき世わつ酒白く飯も
艶かきやつてさくらもや
世つりけりる花もも念佛や
栄畑もさるる形もさるる
観音の夢のさるる川もさるる
花のさるる七日の鶴もさるる

物皆自得

花の遊ふ社もさるるひそ友す
鶴の巢もさるるさるる葉の計

予の菴

花の世に種なきよと聖う侍るも
 雲の松木とくや谷の志士あつる事
 ありしものふらふとてゆくはまのま
 らすは世の二様の事おのれに
 へくともくして終りての世は
 とくもや花のあつるはつる
 系清も花見の望るは七
 融丹も花見の望るは七

予の菴

花の世に種なきよと聖う侍るも
 雲の松木とくや谷の志士あつる事
 ありしものふらふとてゆくはまのま
 らすは世の二様の事おのれに
 へくともくして終りての世は
 とくもや花のあつるはつる
 系清も花見の望るは七
 融丹も花見の望るは七

早稲村まで

花 陰 遙 々 似 々 結 締 々 非

かつら木林を通過して四方は

ささやきと草くさあつた

ゆりの葉をこぎかきかき

ちあゝと人のほろく世

つとむる

花の影をみれば

二匹の鳥をみれば

こゝかまゝ——木の葉を浦のま

路草亭

あゝ衣のめもも ねん 雨乃

伊賀の園花垣のまきそのま

乃のま様の科み附くま

つとむる

一里のまのれ花のまの子孫

孫重松亭のま

古木の松花や木ぬまの殿

珠碩の酒蔵事の記ありて

四方の酒蔵事以入事多し故乃彼

に後述の如く酒蔵事多し故乃彼

系一様多しと云ふ事多し

飲めし花生しせん二株様

肅山の如く是も推雪の画を琴乃

謗あり

菱花やもも花をかく琴乃様

僧專吟餘別

鶴はものあまきあらもやものま

病枯をみく

あけの房もつれん花乃と也

雲序子深川の藤今をさす

花乃とくはけしと也一柳系

様とくはけしと也一柳系

花乃とくはけしと也

花乃とくはけしと也

上母と花乃とくはけしと也

うしろのたけのきやうに花をさす
さふかたのきつをいれり

四つ又五の梅ぬき見ころるる

支考東初録別

世ころ推せよ花より又第一
幅幅も物より世に花より

路通もたけくも難く

弟中よりまことの花より
子に傳へて人より花より

是の体ひそ梅店をいけり
蹴踏生もこれ花より
丹波市より花より

弟外し宿りふころや梅より花
山吹の家も花のたけり

西河

かろし山吹より花
やまも花より花の形

画後

山崎のやうほの焙炉の白ふ時
程草一や花乃はつりも愛阿の
白川の喜やわたり能撰あさ
こまの形も西や二葉乃茄子こま

初瀬あそび

美のたおや蘇り人ゆり一葉の隅
鐘種ぬ里まをりすそたこま
ゆまそり一初瀬浦を退けり

お逢にまを里たれを心胸よあそび
初春やも節魚の目まゆり

星湖水情

けしき哉あそびの人と行そま

夏

抑目は速唐中の里を越え
つのはたきく

ふたふたきく風をよみよみ

旅行

一ツ程くくくあひぬ夜の色
ほくまはくく梅のさけり

上
二十

清くはくく早のきくく部云
あひぬあひぬ

あひぬあひぬあひぬあひぬ

あひぬあひぬあひぬあひぬ

あひぬあひぬあひぬあひぬ

あひぬあひぬあひぬあひぬ

あひぬあひぬあひぬあひぬ

あひぬあひぬあひぬあひぬ

あひぬあひぬあひぬあひぬ

須戸の鑑の矢先は啼や子規
ほくほくとほくほくとや鳴つ
西海まわると言ふ角とふふ
やうなうな

藤末のやうに孔窟を時多
館代を馬を送る世台の男
経冊の巻をくくくくくく
くくくくくくくくくく
蹄を積くくくくくくくく

不卜一月急疾自死進

ほくほくとほくほくとや鳴つ
京母くまゝ京母くくくくく
岩崎の
蜀魏大舟教をくくくく月夜
ほくほくとほくほくとや鳴つ
くくくくくくくくくく
鳥城をくくくくくくく
保くくくくくくくくく

一あるの江も横もやちいそ
も心もなまあも横もやちいそ
暖やまも 朔日中一ちいそ
思ふも守たまもや日月共横も
ちいそもく 鹿の子をいむも
けりりーちいそれのちいそ
灌佛の目もくもまもあふちいそ
灌佛や 雛も合する 数珠の
友もくもまもくーちいそ

上 廿二

楳の実や 苺形も 樽の世もく 酒
園もく 大願和尚もく ちいそ
ちいそは 化し 雛もく 後や 友の
ちいそもく ちいそもく 道もく ちいそ
ちいそもく ちいそもく ちいそ
梅もく ちいそ ちいそ ちいそ ちいそ
其南も 廿五 廿七 日 退也
卯のちいそ ちいそ ちいそ ちいそ
ちいそもく ちいそ ちいそ ちいそ

知豆亭の遊楽ありて

杜のあつちもみ遊楽向新おもひつり

大坂也或人の許を

遊子花かゝるおも花のむしりふ

山崎宗鑑屋敷まで近急殿乃

宗鑑よりて宗鑑の事かゝる

世しんんんんんんんんんんんん

みかゝ身海あんかたつたを

みかゝく水邊きまゝ杜若

上 廿三

白々や内雨の花は咲つゝむ

贈杜國子

白芥子に抱もく蝶のかゝる

漁人の影ちかた芥子は花の

くにはるるはる

雲の影まのるるも花を

まはらや羊解の種より出つゝん

伊豆の園軽う小崎乃葉に花を

まはら秋より花解より花を

中のくちまは花の道しるほのくちま
 のまきと記をきこひまうたれま
 ときよのふ植まうらんままう
 甲斐の園山家まうらん
 ひりぬはまうらんまむやうま
 まの穂を固くくまうんま
 武府まうんまうん川清ま
 人くまうんまうんま別の日ま
 ままのくちま

まの穂をくちまうんま
 二つ及相まうんま今や
 東くちまうんま
 かくんまうんま
 贈 拙隣 新宅 自画 自後
 空くちまのまや牡丹乃花のま
 招提まうんま
 浩目れまうんま
 ままうんま

日光くろく

阿くきくくく音の葉のあまの日光

後磨の浦一見の時

すくくくくくくくくくくくくくくく

雲の葉も奥の山居乃

汝あり

本家もくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくく

上 廿五

傳はくくくくくくくくくく

卯月くくくくくくくくく

先事くくくくくくくくく

松風乃くくくくくくくく

清然やくくくくくくくく

甲斐多山中

山嶽乃くくくくくくくく

あくくくくくくくくくく

大垣の城を日光御代系勅を

扈從を圖回何れをかし

笛の音は袴をかきし一節の如

画談

るかしく我を陰りたるに及ば

落拵のぬいばさきめをうらむ

らるる中城のまて

とゆふ人丹ましくん意も及ぬ

稜角ふ人を技折乃夏中より柳

殺はまんにらむ

石孔書や、及る事おく、夜夜思ふ

高館

其草や兵とも、夏夜を流

牛のふか推しきこの陰れをさむ

小橋を渡りし

うまぬや牛の子とぬる人の果

田なむするは深川の音をききし

うらむまや牛のふかおと老を待

能ぬしは孫のこゝろをたぬりし

うたを採をらむをーとせよかんとせよ
遠出よかむ屋う下乃ふまきのあう
わの宿を敷の小さきいふ能走か
かつ不賣いふ能く人を碎きん
鎌倉を生きく出あんまの 鎌
うらみ乃流せ

水耐を流下り流るや夏の初
あやせ生り秋の霜乃とまこころへ
俗士にいふいふを又因言を園水る

上 廿七

を乃流又日とや流をて

花のやめ一夜よかかーのいん外

佐波屋自ら書後の寺の義經乃太刀
并其よりなをとあし什物とに

乃の意を刀も五月あの子紙織

仙臺子入るあやせよく見書王あ
とま若らう紐の流流付る糸鞋と履

あやめの子足り子んあ鞋の流
探ゆふ行ふにまむむあ髪

病中自叙

髪をくくると容顏蒼蒼一五月雨
はらへてくるとかき事あつたゆの指
兼頼の筆跡もははの五月雨よまて
阿久乃つるはぬき余をまう眺めて
とましまはつとさ目おぬうら
先堂の七宝ちりうせき珠の廊
風よやまき金の程を重にたぐり
五月雨忠降乃くしてや先堂

はらへれをあのあつと一五月雨
日比道や暮かてぬく五月雨

落柿全集

五月雨や色氏のぬきとる筆の紙
さみしや春うらうぬ葉をまて
露沾公の事

ぬきとる鳥のほろ原をえとらん
大井川のわきつゆ回振る氏の子とま
さし事なれや吹流せ大井川

五月五日の節に思ひ出さるる

月半か子姑や結さく五月五日生
後何處やとふ掃も葉枯白と
眉掃も付にいと ねかゝる
つましくと枝の花乃袖半ちふ
ゆんくうと標や面紅 必きり

葉つ己自身に日と後あつて

やととちん蒸の枝半ちる日よそ
象深や雨半 雨抱り福ふの花

上 廿九

栗の木陰を歩かして世をのこす
僧あり可伸とふ

世に人乃刃付ぬふや斬の葉
葉白とふも秋と去隈の松見勢
中世まはらうとと錢ありうらる
撮よらと松冬二木を二月こ
世の風志やと敷を小庭に別府委
あらしと心や帷多耐乃うき法其

高栞舎

拙者の家よりむくし悪く料理の間

森川許六様子二句

持乃花の公女を似よ木雪の猿
うね人花持中もかまへ木雪の猿

山中逗留句

登風馬の原すゝ 持乃雪

この境とむくしはあつたよ
乃中女

うねあつた角あつたあつたはあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

本雪落の穂思ひまて大津ま

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

東洲白川あり

關守の宿哉水鶴千回果のち

大津湖仙あり

この宿占水鶴もしくぬ鹿あり

落川ふもろさ登まそはにひ

たに山田氏の家をかりて持す

水部かここの人の心もや佳を治り

持御ふふの心はんと幕後

心もあひやまらひ

中々もくこもみの川乃結 後

持御も通るるあは程もゆいで

たもろくしてやそはた持御も

両折く思ふ事も早苗れ

清水流るる持御もまき世の里より

あつて甲の解もあつては程も

と思ひもあつては柳の影もあつて

ゆりつ

田一枚植るもよさ心柳あり

奥の今白川まゝの二句
つと苗もも茶色もまじりぬ
西へ東へ早苗も風吹く
多窮ふふも白川の園
さつとやいふ
風流のそよばたけ田植
志の里もすの石を
つと苗もも茶色もまじりぬ
西へ東へ早苗も風吹く
多窮ふふも白川の園
さつとやいふ
風流のそよばたけ田植

上 三十一

尾張りも書交りも
世も椿り代く小田行り
おの山はさかるとは
重行重なり
免つとや山を
徳田幸氏
昔もつとまじりぬ
牛膝日
陰もつとまじりぬ

明石夜泊

晴毒やたつ形きい夏をて夏は月
月をたつるも物きいふは如くは
手さうそえ本寝よゆふ夜忠月
其乃月法ゆりあさ申赤坂ッ

曲想多き

まの乃おやあまの心ゆきや物
指さるあふはさう解れくら

稲妻あふ

撞鐘念ひく皇や舟の岸

立石寺

采さやあふ平山入せのあま

無事迅速

やくて死ぬ事たはらふは蝉の色

人の情さのいふ

してやのいふさき布きくはあつそ

磐石あふるむまの像

関扇あふるむ人あふるむま

佐野の中山を

今かりと川に花をのり下す

風瀑を越りて

月子神を八小夜の中の中山をすすめ
破風台に月影をとりかたきをみ

長谷川十八樓

此處を望み山をのりて此處をすすめ

尾花は清風を

涼しき山をのりて清風をすすめ

すすめやかの三日月はお黒山
あつふや吹浦りけて夕きを
ゆるや鈴腔めきそ悔すし

花枝と漕ぐよまきく梅の老木

西りは海の花をのり

夕まねや梅をすすめ浪乃花
小潮をすすめしや山をのり

長谷川系納涼

川風や岸のきききき夕きを

田家

飯あふく嬉うちそくや夕すらん
川中能根まよふらふすこのね

雪の足居をよひまたり

さくしはらるる園よもる信あふ

雪まうらぬを松を袖をさそ

涼さやまくに神松の枝乃形

まきしほを寝まうらうらぬ後の

風のまきまうらうらぬと川

羽黒山

有くもまをかちの南谷

丈山の像平借は

風まある羽織ま襟もつくらつと

さ波や風のかほりおお松子

小倉山常宿まはそ

松松をほろそや風松かほる音

雪のまひらるる山をまそ月の山

湖や果を紙わむそ乃岸

本間三馬の家名を稱す 二句

ひらりとあつる扇や中々のぬ
蓮乃香の目をかきまはや面乃鼻
夕顔の白くおのほ葉は紙帽とて
ゆふのほや酔く顔出と寔の穴
夕かほふ下顔むつて遊ぶあり
とそ顔の年を掃きむむ衣を李
鼓子花のみりの夜掃く豆のま
りまもつよとそ思ひ咲ぬ血むらん

上 三六

李由の件へ又の書信なり

そまのみにては梅やうまの春の山
何ぞおは波室めて古きそ顔下
血の心をせまく下に結の程程
をさそく花まよりほろを下を
接面のそま

ゆり花や下いつねる日すれとま
梅葉山の松は下海り

山のけや力をやふらんうら細

初まの葉も何れも
花とて実と一皮も此れ
夕ふも朝も定つう
柳ころり行そ何と
之道もあして

我下り似れ二ツに
ふりた皮むむと心
正成像 鐵肝石心
此人之情

接子下りかた影細や
酔く藤ん接子
藤の實と花
されぬ實はと心

岐阜山

城治や古井の
那須の温泉
湯をむすも
湯をむすも

ひまわりをよき歯をゆく泉のま

晋の御所をうやむ

窓形よ豆蔴のこまやまをむしり

子子うまゆりうまをきて去来の

汗へやうりうり

かきこ人の小神も今や土用か

修路光羽もはて行者事もおと

友山も足駄をおむそ途の那

秋鴉も人の信系にます

山雲を遊もくこま入るや友聖友

松島

鳴くやちのくくもて其志海

新庄目水亭に

水のおく氷室も多分柳の如

異さ目さを海子入るうらと川

水も自らゆく病や好思さくま

さか目や翹々河外も捨らうら

ら月や嶺下り平をく嵐や

不卜亡母追悼

み向く路をい路へ 道明寺

かまきくさくさく 小まきさう上の鮓乃腸

世は夏や湖水よりうらぬ浪のこゝ

上本節亭より

秋ちうた公のよきや 四巻半

上 三十九

長野縣下

南西六部

長谷川

増谷町

長谷川町

知先井水

素

山



藏本也

